＜前回＞オリエンテーション

１．近代の思想状況と自然神学

２．自然神学の新しい動向

３．形而上学批判と形而上学再構築

　３－１：ハイデッガーと解釈学

　３－２：ホワイトヘッドとプロセス神学　7/23

**Exkur**：人文学の新しい可能性。科学技術の神学にむけて。

＜前回＞ハイデッガーと解釈学１

# ３．　形而上学批判と形而上学再構築

# ３－１：ハイデッガーと解釈学

## A．ハイデッガーとキリスト教

### （１）ハイデッガーは無神論者か？

１．Paul Tillich,"Heidegger and Jaspers," in: Alan M. Olson（ed.）, *Heidegger & Jaspers*, Temple University Press, 1994, pp.16-28.

This ambiguity in Heidegger's relationship to God persists throughout his work, for his interest is not theology but ontology, the question of Being and nothing other than Being.（17）

２．辻村公一『ハイデッガー論攷』創文社、1971年。

３．小野真『ハイデッガー研究――死と言葉の思索』京都大学学術出版会、2002 年。

ディディエ・フランク『ハイデッガーとキリスト教』萌書房、2007年。

Otto Pöggeler, *Philosophie und Hermeneutische Theologie. Heidegger, Bultmann und die Folgen*, Wilhelm Fink, 2009.

### （２）ハイデッガーと形而上学

４．Martin Heidegger, *Was ist Metaphysik?* Vittorio Kostermann, 1969.

５．O・ペゲラー『ハイデッガーの根本問題――ハイデッガーの思惟の道』。

６．ハイデッガーの形而上学批判

ハイデッガーは、『形而上学とは何か』（*Was ist Metaphysik?*）の「序論」において、キリスト教を含む西洋的思惟の総体としての形而上学について次のように論じている。

形而上学とは、「存在するものとして存在するものを思惟すること」（ibid., 8）であるが、それは、「存在するものを存在するものとして問うがゆえに、存在するものにとどまり、存在としての存在には向かわない」（ibid.）。したがって、「存在の真理は形而上学にとっては隠されている」（ibid., 11）。この「存在するものと存在との混同」「存在忘却」（Seinsvergessenheit）（ibid, .12）において、形而上学は、存在するものの存在性（Seiendheit）を二重の仕方で表象する。つまり、一方では、存在するものの全体を、その最も普遍的な特徴の意味において（存在論）、他方では、最高の従って神的なものの意味において（神論）、と。ここから、形而上学的思惟が狭義の存在論であるとともに神論であるという二重の性格、「存在―神論的本質」を有していることが明らかになる（ibid., 19）。キリスト教的西洋世界において、ヘブライズムとヘレニズムが緊張関係にありつつも一つの思惟世界を形成したのは、単なる偶然ではなく、いわばそれ自体が、存在の「性起」（Ereignis）、「存在の命運」（Seinsgeschick）として生起したのである。今や、ニーチェと共に、古代ギリシャを第一の元初（erste Anfang）とする形而上学的エポックは夕暮れにさしかかり、存在の命運

は第二の、別の元初(andere Anfang)へと移行しつつある。

**７．キリスト教思想と形而上学再考**

**（３）ハイデッガーと否定神学・隠れたる神**

８．茂牧人『ハイデガーと神学』知泉書館、2011年。

９．「ハイデガーは、自分の思索を形而上学としてのキリスト教神学に批判的に向けるのと同時に、そのキリスト教神学解体の力をキリスト教神学自身からえている。」（vi）

10.「キリスト教神秘主義の伝統の中の否定神学と〈隠れたる神〉の神学との思索に潜んでいたこと」（viii）

**（４）ハイデッガーと聖書的思惟との屈折した関係**

11. M・ザラデル『ハイデガーとヘブライの遺産――思考されざる債務』法政大学出版局。Marlène Zarader, La dette impansée. Heidegger et l'héritage hébraique, Seuil, 1990.

12.「ハイデガーの仕事のなかで一貫して維持される二重の還元」「まずは（ギリシャ語で書かれた）新約への聖書の還元であり、さらに今度は、この新約のテキストが信仰(foi)の経験という純粋経験へと還元されるのである。」(8)

「以上のことから、キリスト教に関するハイデガーの理解が帰結する。ハイデガーによると、キリスト教はそれが有する数々の次元のうちの二つによって全面的に解明される。一つは信（思考の秩序とは無縁だということが信の特徴である）であり、いまひとつが存在-神学（ギリシャ思想に還元可能なものであることがその特徴である）である。ということはつまり、キリスト教の根源的な唯一の特徴（十字架にかけられた神への信仰）はまったく思考に係わるものではなく、キリスト教を思考に係わらせる特徴はなんらキリスト教固有のものではないのだ。」(8-9)

「聖書の宇宙の総体を（キリストへの）信というただひとつの次元に還元したがために、思考のヘブライ的源泉はハイデガーによって無効を宣せられることのまったくない状態にとどまる。」(10)

「必然的に秘密の係わりであり、虚偽を施された係わりであろうから、その二重の錯綜を解くことが問題になろう。二重の錯綜と言ったが、一方ではハイデガーの思考に押され旧約の遺産の刻印を示し、いま一方ではそれと併行して、ハイデガーの思考がいかにしてこの遺産を隠蔽しているかをしめさなければならないのである。<u>しかし、こうした読解の可能性をわれわれは誰から引き出すのだろうか。ハイデガー自身からでないとしたら、誰から引き出すのだろうか。」</u>(21)

「いかにしてこの集積がハイデガーのテクストのうちで作用しえたのか、言い換えるなら、<u>いかなる道を通って伝達がなされたのか</u>、この点を示すべきであろう」、「若きハイデガーと神学との係わり、それも、フライブルク大学での初期の講義」(23)

13.「歴史の領野と形而上学の領野」「二重の拡張」

「聖書における同じ諸規定の存在がハイデガーによって見誤れているのに対して、これらの規定の聖書における所在はすでに見いだされるのみならず、長きにわたって註解を施されてきた」、「三つの例」「言語、思考、解釈」(53)

14.「言語は、存在者が現れるための条件であり、存在者が現前のなかに出現し立ち現れるための開けなのである」(60)。「ハイデガー的なアプローチにおいて詩人を特徴づけている特質の大部分は聖書の予言者に見いだされる」、「個々の点で、ギリシャの予言者と聖書の予言者の明確な差異が確認される場合、詩人にハイデガーが与えた特徴はつねに聖書の予言者の側のものであること」、「この類似を包み込む沈黙」(83)

## Ｂ．ハイデッガー・解釈学と科学

### （１）ハイデッガーと解釈学

１．Ｐ・リクール「解釈学の課題」(『解釈の革新』白水社)

「『存在と時間』によってなされた、この第一の転回は第二の転回を呼び寄せる。」(161)

「ガダマー」「帰属と疎隔との間の圧倒的な対立関係」(172)、「参加と疎隔の弁証法」(173)

「「言語性」(Sprachlichkeit)が「書記性」(Schriftlichkeit)になるとき」「われわれに遠隔伝達されるのは、テキストの事がらであり、それはもはやテキストの書き手にも、読み手にも属していないのである。」(174)

### （２）キリスト教思想と解釈学

２. 小田垣雅也「解釈学的神学」(『知られざる神に――現代神学の展望と課題』創文社、1980 年、150-171 頁)

「解釈学的神学の意図の一つは、いわゆる神の言葉との出会いと聖書の批判的研究を橋渡しすることであるが、ブルトマンの矛盾を追及することで、その意図は果たされるだろう。又この作業の中で、解釈学的神学が基本的に、主観―客観構図を超えた神学であることも明らかになるであろう。」

「解釈学的神学とはこの両者、即ち批判的学問と実存的信仰とを橋渡ししようとするものであるとも言える。」(150)

「理解そのものを検討する普遍的解釈学と、個々の文書の批判的検討、その解釈上の規則を扱う個別的解釈学の対立」、「普遍的解釈学の発展につれて、解釈学がそれまでの認識論的なあり方から、存在論的位相のものに転回したという事情がある。しかしその場合でも、個別科学的な解釈の方法論は維持されねばならないはず」(151)

「リクールによれば、解釈学の歴史には二回のコペルニクス的転回があったと言う。」(151)

第一回：シュライアマハーによる普遍的解釈学の開発

第二回：理解を存在論と結びつける、ハイデッガー

→ ブルトマンの「前理解」(Vorverständnis)

ガダマーの「解釈学における「間」(das Zwischen)」

「理解とは、常にそれ自身で存在しているかの如く思われる諸地平の融合の過程のことである」、「理解とは、その本質において、一つの影響史上での過程なのである」(160)

↓

「解釈学が位置すべき場所は、資料に対する解釈者の疎遠さ(Fremdheit)と親密さ(Vertrautheit)との「間」にある。」

「後期ハイデッガーの、言語理解を内容とした「出来事の解釈学」とは」「世界と自己とを含めた理解とは、出来事であり、それは言葉によって達成されるものだと述べたのであった」、「この出来事の解釈学とは、「間」の解釈学ということである。」(164)

「武藤一雄教授はこの「間」を「中」と表現している。」(166)

「解釈学の基本的な意図が、テキストの、更には人間そのものの、的中した理解を求めるものである以上、伝統の中での先入観にもとづいた解釈の中に頽落している理解に対して、解釈学は破壊の作用をなすとペゲラーが注意している。批判的破壊のない学問はないし、批判的破壊を恐れる時、宗教は衰弱する。解釈学的神学は、「間」の、流動的、出来事そ

しての神学として、その意味で聖書を解釈する個々人の責任を常に問いつづける神学として権威主義の中に頽落した神学を批判し、更には破壊する側面を持っている。」(170)

（３）ガダマーと科学

３．ハンス=ゲオルク・ガダマー『科学の時代における理性』法政大学出版局。

Hans=Georg Gadamer, *Vernunft im Zeitalter der Wissenschaft*, Suhrkamp, 1976.

第一章 諸科学における哲学的なものと哲学の学問性について

「われわれが哲学と呼んでいるものが、いわゆる実証的な諸科学と同じ意味で科学（Wissenschaft）でないことは明白である」、「哲学は全体的なものに関わる」、「それは、全体的なものとして、すべての有限な認識可能性を越える理念」、「とはいえ、哲学の学問的性格について語ることも、やはり十分な意味がある」（1）

「哲学の起源において、哲学と学問とは不可分な仕方でひとつであるし」「どちらもギリシア人の創造物である」

「われわれの語法においては、哲学は、ここで「諸科学における哲学的なもの」と呼ぶことのできる一切のものを、・・・或る科学のその都度の対象領野を規定している諸々の根本概念のことを、意味している」、「哲学は、科学であることなく、いかにして科学の拘束力を所有することができるのかという問いが、そしてとりわけ、研究の論理が、自分の法則に服従しない、全体的なものに関するすべての幻想的な思弁を拒絶することを十分自覚するようになってきた今日、哲学はいかにして弁明という哲学的要求を満たすことができるのかという問いが、立てられることになる。」（2）

ヘーゲル「形而上学をもたない国民とは・・・」「「国民という語」」「政治的な統一体のことではなく、言語の共同体のことを指している」（4）

「言語を主題化することによって、全体的なものに向かう形而上学の古い問いにとって新しい基礎が提示されるように思われる」、「社会的存在者として最初からそのなかで生きている媒体であり、＜われわれがすっかち溶け込んでいる全体的なもの＞を開いてくれる媒体である」、「コミュニケーションが行われるところではどこであっても、単に言語が用いられるのではなく、言語が形成されるからである」（5）

「近代は」「ガリレイによって初めて部分領域において実現され、デカルトによって初めて哲学的に根拠づけられることになった＜学問と方法に関する新しい概念（科学）＞が登場するということによって、一義的に定義されるからである」、「十七世紀以来、われわれが今日哲学と呼んでいるものは、これまでとは違った状況のなかに置かれているのである」、「哲学は諸科学に対して正当化を必要とするようになった」（7）

「言語のうちに書き留められたわれわれの生活世界の了解は、科学の可能性によっては、完全にとって代わられることはできないからである」、「われわれが生きている世界を、言語とコミニュケイション的協同によって分節化すること」（14）

第六章　哲学か科学論か

「哲学がそれ自身厳密な科学であるべきだとされたのである。十九世紀後半のカント再発見という旗印のもとでは、これは自明なことであった。」（119）

「十九世紀において認識論が哲学の根本学科へ昇進し」（120）

「精神諸科学は、このような道を辿って、自然科学の認識論的正当化と類比的に、超越論的に根拠づけられた。例えば、歴史的事実という概念を定義するのは、まさに価値関係だったのである」、「カントへの復帰、すなわち、様々な変種をもつ新カント主義は、支配的な時代潮流にひとつにすぎなかった。」、「ミル」「コント」（121）
「実証的なものという概念、すなわち、与えられたものという概念は、まさにそれ自身において未規定的かつ多義的であった」「意識の所与性」（122）

「志向性の概念において、＜認識論の概念と認識論の理論的な構築物の根底に存していた、自己意識の内在性と世界概念の超越性との間の独断的な分裂＞が根本的に克服されたのである。現象学が意識の志向行能作のうちに一切の客観的妥当性の構成が根拠づけられるものである以上、認識論は認識の現象学に、哲学は現象学に変化したのである。」（123）
「形而上学」「第一哲学は単に哲学的諸学のうちの第一のものにすぎないのではなく、ギリシア的-キリスト教的伝承の総体のうちに包括されたているすべての学問一般のうちで第一ものであった。つまり、「哲学」とは、学問を意味しているのである。」
「十七世紀」「学問の新たな理念（＝科学）が展開され始め、その最初の理論的な根拠づけが見出されたのであった」、「ガリレイの力学」（124）、「数学的構成に従属させ、こうして自然法則の新しい概念を獲得した」、「人間の目的のために自然を技術的に改造すべく学問を完全に応用することを可能にした」、「方法の理念」
「問題なのは、新しい（科学としての）学問理念と古いそれを排除するという関係ではなく、古いそれを新しいそれとの対決、それどころか、合一であった。これが、それ以後の、「哲学」の「本来の」課題になったのである」、「カントとヘーゲル」（125）
「デカルトにとって」「フッサールにとってすら」、「デカルトにとって、形而上学の真理性に関する自分の新しい考察の全体的なポイントは、＜こうした古い真理概念と、神によるこの概念の保証を背景にしてのみ、新しい学問（＝科学）は根拠づけ可能になる＞という点にあった」（126）
「プラトンの問答法（弁証法）の革新者ヘーゲル」「コミュニケイション的に理解された知的な世界への方向転換に、ヘーゲルもなお従っているのである」（128）
「ディルタイ」「世界観の数多性」（129）
「世界観をこのような学問（科学）的に取り扱おうとする思惟形式が、類型論となったのである」「歴史的相対主義という根本的な異論が、隠されていたのである」（130）
「科学（＝学問）が哲学に依存しないということは」「科学が責任を喪失したことを意味している」、「科学が＜人間の現存在の全体において、すなわち、特に自らを自然や社会に適用する際に、自分自身が何を意味しているのか＞という点について弁明することもできず、またその必要性も感じていないという意味でそうなのである。」（131）
「すべての科学論そのものの根底に、科学論が自らを越えていかざるをえなくするような、自己正当化の思想が存しているということである。こうしてみると、すべての科学的方法論になお先だって存在している自然的な世界経験と、この経験を構成する諸概念の解明を企てたということが、新カント主義のそのほかの諸形態と対照的な、現象学の特色だったことになる」、「「生活世界」という後期の語に刻印された意味」

「ところが、まさにここにおいて、現象学は「究極的に根拠づける」という自らの理想の限界に突き当たったのである」、「純粋意識の学としての現象学の自己関係性という難問

であり、とりわけ、自我という超越論的自己意識が巻き込まれている、時間性の自己構成という難問」、「その際に、決定的な突破口になったのが、意識概念に対するハイデッガーの批判であり、そして、この概念が存在論的に先取りされていることの発見であった」(132)、「現存在の時間性」「存在問題の地平を開示する現存在の有限性と歴史性が・・・超越論的な根拠づけという思惟形式全体が変改されるということ」、「科学の客観性概念が、人間の現存在および＜この現存在が世界に差し向けられているということ＞の派生的な様態として、存在論的に理解されるということ」、「今日では形而上学ではなく、むしろ科学の方が「独断的に」乱用されているということ」(133)
「ウィーン学団」「カール･ポパー」「トーマス・クーン」(134)
「直線的歩みという誤った様式化を正当に批判し、パラダイムに基づく様々な根本構想のその都度の支配によって引き起こされる不連続性を明らかにしている」、「ウィトゲンシュタインの自己批判と彼の言語ゲームという考え方」、「一義的な科学言語に変わって登場し、そしてこれと共に、認識の根拠づけという論理的な課題が、最も多様な会話様式と言語ゲームの論理的な分析に取り組む、いわゆる言語分析的な哲学の課題へと変化したのである。」(135)
「言語が自らのコミニュケイション的仕事と果たしているところでは、言語は、自己了解の作用の技術、あるいは機関系として働くのではなく、この了解そのものであり、＜われわれが互いに理解し合える――それどころか、まさに同一の――言語を語っている共通の世界＞を建設するまでに進んでいく、了解そのものなのである」、「われわれ人間の生の言語的体制なのである。」(137)

「諸科学それ自身のうちにおいて、解釈学的な次元が諸科学を真に担い根拠づけるものとして証示されている」、「例えば、自然諸科学においては、それは、パラダイムの次元および問題設定の重要性の次元として」(137)
「ハイデガーによれば、われわれがその中に立っている諸々の伝承」「は、問題の科学的制御の対象領野や、未知なるものに関するわれわれの知の支配の拡張を表わすというよりはむしろ、われわれの＜自己＞と、われわれに受け継がれたわれわれの現実の可能性との、すなわち、存在しうるものや、生起したり、われわれから生じたりするかもしれないものとの、媒介を現わしているのである。」(138)

**（4）ヴァッティモと科学**

**4．ジャンニ・ヴァッティモ『哲学者の使命と責任』**法政大学出版局、2011年。

**1　哲学と科学**

「カント主義を危機に陥らせたのは」「世界には複数の文化が存在するという事実であった」(8)
「哲学はもはや「批判的な」科学ですらありえないということである」(9)
「科学哲学というのは」「一種の社会学、文化哲学である」、「これはこの種の文化的活動が人びとの生活を変革するうえで生み出してきたもろもろの効果についての歴史的反省でなければならないだろう」(10)
「ガダマー」「科学にたいして倫理的な限界を提示しているのである」、「科学の社会的・歴史的な効果の問題」、「この倫理性は精神の連続性、すなわちわたしたちはあるひとつの共通の状況に属しているという事実と関係がある」(12)

「形而上学にかんするハイデガーの議論の意味するところをガダマーはほんとうには受けいれようとしていないこと」、「ガダマーがハイデガーの形而上学批判を受けいれるのは、なによりも科学主義ないし科学客観主義にかんしてである。ハイデガーのいう真の意味での＜存在＞の歴史といったものはガダマーの念頭にない。」（13）
「わたしはハイデガーと同じく、科学を現代における＜存在＞の運命の本質的な一側面であるとみているからである」（14）
「世界像は本質的に複数の像に転化する」（15）
「これらはすべて＜存在＞の命運にかかわる出来事である」（16）
「ガダマー」「相対主義とヘーゲル主義の中間に立ち止まってしまっている」（20）
「弱い思考こそヘーゲル主義に取って代わることのできる唯一のオルターナティヴなのではないだろうか。もし理性の最終的自己確証に向けての過程がないとしたら、あとには弱い存在論という着想しか残らないのだから」（21）
「もしなんらかの純粋な相対主義に陥ってはならないとするなら、しかしまた他方、ヘーゲルから究極的絶対性の理念、すなわち完全な自己意識という理念を奪い去ってしまったなら、なにを代わりに置けばよいだろうか。運動の原理に転化した[「存在」と「存在者」の]存在論的差異の原理に訴える以外にないのではないか」（22）
「存在者の直接性を乗りこえてなにか別のものに向かうひとつの仕方」「おそらくはもっと「完璧な」かたちで、科学はまさしく＜存在者でない存在＞を代表している」（24）
「「絶対主義的な」存在論、すなわちヘーゲル的な存在論」（25）
「「どんなもの」は複数存在すると主張する者、すなわち、「なんでも可」というテーゼを主張する者には、他のテーゼを主張する者たちよりも多くの道理があるということなのだ」（27）
「弱体化してきた存在の歴史」（28）
「わたしはどうやらフッサールが軽蔑しているような観点から哲学について考えている。エッセイスト風の教化行為としての哲学のことを考えているのである」（30）
「わたしは哲学にも一定の累積的な側面のあることを否定しない」、「哲学もまたテクスト的な伝統がなくては存在しえないという意味である。だから、歴史主義者として、わたしは「累積主義者」だと自覚している」、「哲学は文化的な知であって、テクストによってのみ定義される」（31）
「あるテーゼが普遍的な価値をもつということ自体、複数の文化が存在してはじめて思考しうるようになるからである」、「相異なるパラダイムないし互いのあいだで深く異なる見方が出会うようになってはじめて、普遍性にまつわる問題が生じるのだ」（32）、「さまざまな宗教的信条が衝突しあい、自分とは別の信条に出会って、それらとある種の共通基盤を見つける必要があるときに、合理神学が重要性を帯びて登場してくるという事実である」（32-33）、「この人類一般に普遍的な基盤はじつはそれほど普遍的ではないのではないか」、「その基盤自体が歴史的な変成をとげており、それをわたしたちはたえず構築しなおしているからである」（33）

「哲学にも実験的な面があるとしても、それは「客観的な」認識をもたらすと想定されているようなタイプの実験性ではない。哲学も経験に訴えることができるとわたしは確信している。哲学にも経験的真理があるとわたしは確信している。けれども、その経験はすでに主観的・文化的に媒介されたものであって、それを客観的な「獲得物」というように語

ることはできない」、「自明という意味であたりまえの真理」「その自明性は大部分が文化からなっているのである」(35)

## ２　哲学、歴史、文学

「レトリックとしての真理」「真理は」「説得の問題である」、「哲学が使用する論法は複数の人間を相手にした論法であって」、「説得によって明らかにされる真理なのである」、「人びとが広く分かちあって前提から出発して解釈しようという提案」(41)

「哲学において問題となる真理は複数の人間を相手にした説得の成果であるが、ハイデガーのいう＜存在＞の歴史への一定の信頼にもとづいている」(42-43)

「＜存在＞の歴史への信頼」、「それらがそのような古典に転化してしまったという事実はわたしをも渦中に巻き込んでいる。わたしというは存在は大部分、古典が執拗に存続しているおかげで生まれたものなのだ」、「ガダマーが先入見の果たす積極的な意味での根源性を主張し、客観的精神の意義を強調しているのは、一理あることだった。わたしが結局ふたたびキリスト教信者になったのも、同じ理由による」、「歴史にはなにか神のようなものが存在する」(43)

「自分たちは神によって造られた存在であるという意識とでも呼んでよいもの」、「わたしたちは自分の力でこの世に存在しているわけではなく、他の者たちのおかげでこの世に生を享けている。そして、この事実こそわたしに遺贈された財産なのだ。この世で唯一わたしが手にしている大切な財産なのである」(44)

「教化としての建設には知の累積していくという意味も込められている」、「哲学が関係するみずからの過去は最終的に確定された土台としての過去ではなく、つねに新たな解釈へ開かれている可能性の総体としての過去」(45)

「研究の伝統」「この意味では哲学と文学的解釈学と科学には連続性がある」、「じっさには事件の場合にも、そこで使用される言語や実験方法は歴史的に規定されているという問題が生じる」(46)

「神の死についてのニーチェの告知」、「神の死というのはむしろ、わたしたちが巻き込まれているもろもろの出来事の経過を見やって、大胆にも「神はもはや必要でない」と認めてみようと解釈したものなのだ。「神は死んだ」という告知は、科学と技術のおかげて原始人が感じていたような恐怖なしに生きられる世界では神はもはやなくてもかまわない、と人びとが広く認めていることの証にほかならない」(49)

「ニーチェの解釈で神がもはや無用の嘘であることが露わなるのは、ほかでもない神への信仰によってわたしたちの個人的・社会的な生活になかに導き入れられてきたもろもろの変容によるものなのであった。つねに安定と安心の原理として機能してきた神は、つねに嘘を禁じてきた神でもある。だから、信者たちが「神が存在するというのは嘘である」と言明するのも、神の命令にしたがってのことなのだ」(50)

「真理の経験を本質的に解釈的なものであると認めるのはそれ自体がひとつの解釈であることが認められる。また、真理が歴史的なもの（地平的なもの）であるという理論はそれ自体がひとつの歴史的な真理として受けいれられるのである」(51)

「わたしがわたしという存在について意識しているときにはわたしはすでに変わってしまっている」、「「わたし」は、わたしという存在であるのに加えて、わたしという存在についての意識でもある」、「この点こそ現象学や弁証法などカント以降の哲学すべての根底

をなす要素にほかならない」、「これはまた解釈学の前提でもある」、「進行する事物とそれを不完全なかたちで記述するフレーズからなる総体」（52）
「完全なニヒリズム、「いっさいが解釈である、そしてこういうふうに言っているのも解釈である」という立場の方のほうがまだましである」（54）
「自己意識はけっして事物の状況に適合した記述になることはない。それ自体がつねにゲームに巻き込まれてしまっているからである。解釈学的な解釈概念だけがなんとかこれを考慮に入れている」（54）

「科学的研究によって可能なものになった技術の使用にかんする問題は、ハイデガーがいつも言っているように、「技術の問題ではない」ということである」、「それが人間生活一般におよぼす効力と「波及力」のことであるとするなら、技術自身の問題ではないのだ」（56）
「わたしはハードな科学、実験科学の領域において起きることも存在の歴史なのだとみる観点のうちに自分を位置づける。そして存在の歴史にとって肝要なのは言語的メッセージ、文化的メッセージの伝達である」、「科学のほうが客観性の基準の変化のリズムが緩慢であるということができるにすぎない。科学の場合には、基準は長期にわたって緩やかに変化していく」
「哲学はわたしたちが日常的に展開している言語活動の自己意識である。より正確に言えば、メタ言語活動の自己意識なのだ。そして、そうしたメタ言語活動の内部に個々の言語活動はすべて位置していて、そこにおいてそれぞれの安定性を得ているのであり、時と場合によっては変化をこうむっているのである」（57）
「自然科学とも精神科学とも異なったまったく別のなにものかでありながら、しかもその両者のうちに含まれている。「ハードな」科学といえども解釈的な学だからである。解釈的な知であって、たんなる記述的な知ではないのだ」、「客観性自体も＜存在＞の歴史のうちに位置しており、＜存在＞の歴史に所属しているにすぎない」（58）

## ３　哲学における論理

「形式的な厳密科学の領域も＜存在＞の歴史に巻きこまれているという事実」（65）

「哲学は日々の言語活動、自然的な言語活動によって構成される言説なのだ」（67）
「哲学と日常言語で織りなされた言説とのあいだに特権的に存在する関係」、「哲学が歴史的な知であることは明らかである。もっとも、「歴史的な知」といっても意味するところは多様である」、「歴史的地平は日常言語で織りなされた言説にノーマルなもの（そして部分的には規範たりうるもの）としての資格をあたえる。哲学の仕事はあくまでも日常言語で織りなされた言説に立脚して遂行されるのである」、「その言説にはらまれている矛盾を明るみに出したり、その言説をいっこう首尾一貫したものにすることにある」（73）
「間違いを修正する道を見つけ出すのに歴史の外に飛び出して、理念の世界でしか見つからない原理に訴える必要はさらさらない」（74）
「哲学にも（思考の規範となる）論理があり、その論理は歴史に根ざしたものであるということと、哲学は複数存在する論理学のなかからあるひとつの論理学を選好するという考えは矛盾するとは思えない」、「だが、それは歴史を超えて選好しうる言説ではない。あくまでも今日という時点で選好しうる言説であるにすぎない」（76）

「ハイデガーが注釈している聖パウロの書簡で語られているパルーシア［救世主の来臨］の問題に似ている。メシアは現実には到来しないかもしれないが、メシアが到来するだろうという約束と期待が、メシアにすでに出会ったという最初のペテン師の言葉を信じこまないようにさせているのである。＜存在＞の歴史もこれに似ている。それはあるひとつの必然性の歴史ではない。そうではなく、必然性として提示される教義論的なテーゼを軽率に信用してはならないと教える一連の出来事の推移、それが＜存在＞の歴史なのだ」（78）
「ハイデガーが＜存在＞の歴史について語るとき、彼が言わんとしているのは、あるメッセージがわたしに呼びかけているということである」
「存在論について語る唯一の方法は＜存在＞だけでなく、＜存在＞の歴史について語ることである」、「存在はわたしたちにとってしか生起しない。存在は被投的投企というかたちでしか存在しないのだ」（79）
「存在論的なものはある歴史の内部でしか生起しない」、「わたしたちが「なんでも可」と言うのに抵抗している何ものか」（80）
「＜存在＞の声はどこからやってくるのか」、「その強制力はどこにあるのか」、「わたしがみずからに同化し承認している過去に生きられた伝統、そして現在も言語活動のなかで生き延びつづけている伝統から、わたしのもとにやってくるのである」（81）

**＜参考文献＞**


１．梅原猛・竹市明弘編『解釈学の課題と展開』晃洋書房。
　　長谷正当「宗教現象学と解釈学」
２．塚本正明『現代の解釈学的哲学――ディルタイおよび」それ以後の新展開』
　　世界思想社。
３．麻生建『ドイツ言語哲学の諸相』東京大学出版会。
４．小田垣雅也『解釈学的神学――哲学的神学への試み』創文社。
５．Johannes Nosbüsch, *Der Mensch als Wesen der Sprache. Eine problemgeschichtliche Erörterung in systematischer Absicht*, Anton Hain, 1972.
６．Jean Grondin, *Einführung in die philosophische Hermeneutik*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1991.